

## イギリス、フランスに所蔵される『アクバル・ナーマ』の写本について

近 藤 治

〔抄 録〕

ムガル朝アクバル時代に編纂された『アクバル・ナーマ』は、著者アブル・ファズルがアクバルの同意をえつつ1602年に暗殺されるまで書き続けた編年体の同時代史であり、この時代の正史に相当するものである。この大作の写本は、前回紹介した同じ著者の『アクバル会典』以上に多くのものがヨーロッパの各研究機関に所蔵されている。本稿では大英図書館、旧インド省図書館、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館、ケンブリッジ大学図書館、フランス国立図書館に所蔵される27種の写本について、実見に基づく検討と紹介を行なった。またやむなく実見できなかったロンドンの王立アジア協会所蔵の写本や、アイルランドのチェスター・ビーティ図書館所蔵写本、『アクバル・ナーマ』英訳者H. ベヴァリッジの紹介写本についても簡単ながらふれておいた。

**キーワード** アクバル・ナーマ、写本、大英図書館、ケンブリッジ大学図書館、フランス国立図書館

### はじめに

3年前、私は本誌に『アクバル会典』の写本についてイギリスとフランスで実見したところを記した一文を発表した<sup>(1)</sup>。前任校追手門学院大学から派遣された私の英国研修の主要な目的は、アブル・ファズルの著したこの書について研究することであったので、当然のことながらその写本をできるだけ多く調べるよう努めた。同じ著者の手になる大著『アクバル・ナーマ』は『アクバル会典』とセットになっているので、後者について調べようとするれば必然的に『アクバル・ナーマ』の写本を目にする機会があった。そういう場合に私の手元に控えておいたメモをもとにして、『アクバル・ナーマ』の各種写本について私の実見記録を整理したものが本稿である。

整理の仕方は、各図書館とその写本請求番号に通し番号を付けて小見出しとし、それぞれの

写本に関する写本目録記載事項を紹介した後に私の実見記録を記していくという方法を取ることに、前稿と同様である。また所蔵機関や写本目録の略記法も前稿と全く同じである。

### 『アクバル・ナーマ』の写本27種

#### 〔1〕 British Library Add. 6545

641葉。10.25×6.5インチ。各ページ18行または21行。各行4.75インチ。崩したナスターリーク体。ターネサルにて、ヒジュラ暦1113年（西暦1701）第1 ジュマダー月の日付。『アクバル・ナーマ』第1巻後半と第2巻。治世第17年の記述は欠損。268b から始まる第2巻は結語（Khātima）まで完備。（Rieu, I, p. 250）

1a-3b は目次であるが、紙質・筆蹟ともに異なり、写本当時よりも後の時代に作成されたものであることは明らか。4a（写本本文 1a に相当）の上部には「アクバル・ナーマ第2巻および第3巻。アルシュ・アーシャニー（アクバルの諡号「天上の玉座」の意）・アクバル皇帝の諸事件を記し、アッラーミー・シャイフ・アブル・ファズルの編んだもの」と書かれ、その下に楕円形の印章が押されているが判読は難しい。4b にウンワーン（‘unwān 書籍の扉）用の空白はあるが、未完成。赤の二重線と紺の三重線の枠取り。書体は草書風のナスターリーク体で、シカスタ体に近い。見出し語は朱筆。処々に朱の傍線。第14葉（f.14）から当初の写本紙。f.4 から f.13 までも後になって破損葉の書き替えが行なわれたものようだ。筆蹟も当然のことながら異なる。f.14 以下の余白および行間には校合のあったことを示す細い墨筆の書き込みがある。256b は全ページ空白。第2巻は 268b から始まり、ここにウンワーン用の空白が用意されているが、未完成。f.269 から料紙が変わる。ここから余白・行間になされていた校合のための細い墨筆の書き込みはなくなる。それとともに各葉 a 面の左上枠取りの外に書かれていた葉数番号も、ここから書き起こされて 2、3、4…と付されている。すなわち f.268 が新しく第1葉として数えられているのである。第2巻の筆蹟は別筆である。要するにこの写本は、『アクバル・ナーマ』第1巻第2部と第2巻とのそれぞれ別個の2つの写本を合本したものである。前半部の写本は古いが、後半部の写本はそれよりも新しい。後半部のコロフォン（奥付）には確かにヒジュラ暦1113年と書かれているので、前半部の写本はそれよりも古い17世紀後半のものと考えられる。

#### 〔2〕 British Library Add. 7651

347葉。11×6.5インチ。各ページ21行。各行4.12インチ。ナスターリーク体。17世紀前半作成。『アクバル・ナーマ』第1巻第2部。アクバル治世第17年までの記録と第2部の結語を収める。最後のページにヒジュラ暦1062年（西暦1652）第1 ジュマダー月の付記あり。（Rieu, I, p. 250）

1a 左上部に「アクバルの歴史」(*Ta'rikkh-i Akbari*) と墨書。1b にウンワーンなし。枠取りなし。良質の料紙を使用。見出し語は朱筆。保存状態良好。余白の書き込みはほとんどなく、校合の跡は見られない。

〔 3 〕 British Library Add. 16,692

409葉。10.25×6.5インチ。各ページ21行ないし23行。各行4.25インチ。シカスタ体混じりの書体。アクバラーバード(アークラ)にて、ヒジュラ暦1114年(西暦1702)サファル月の日付。『アクバル・ナーマ』第1巻の写本。第1巻第2部は178bから始まり、ここに別個のウンワーン。治世第17年の記述で終わる。(Rieu, I, p. 249)

1a の中央部に古紙片が貼付され、それに「アクバル・ナーマ巻1」と書かれている。2a 中央やや上部に Allāhu Akbar と記されている。2b 上部に金粉を配した飾り扉。各ページは、赤青各二重線、都合四重線の枠取り。ただしこの枠取りは斉一性に欠ける。書体はシカスタ体。各ページには校合を示す墨筆の書き込み。虫喰いや汚損は全くなく保存状態は良好であるが、上質の写本ではない。朱筆の見出し語や傍線の記入あり。上記リユーのカタログがいうように各ページ21行ないし23行とは限らず、19行や18行のページもある。170a は空白。170b に金粉で飾った中扉があり、ここから第2部が始まる。

〔 4 〕 British Library Add. 17,926

366葉。9.25×5.25インチ。各ページ19行。各行3インチ。書体は小ぎれいな小字のシカスタ体混じり。各ページ黄金線の枠取り。ヒジュラ暦1097年(西暦1686)ズール・カーダ月の日付。『アクバル・ナーマ』第1巻。同巻第2部は183bから始まり、治世第17年の記述と第2部結語で終わる。(Rieu, I, pp. 248-249)

24×14センチメートル。1a 中央部に *Ta'rikkh-i Akbar Shāhī* (アクバル王の歴史) と書名書き。各ページ黄金線の枠取り。ウンワーンはなし。見出し語は朱筆。183b から第1巻第2部が始まるが、ここにもウンワーンなし。上質の黒色皮革の装丁は当時のもの。

〔 5 〕 British Library Add. 18,541

387葉。12×7.5インチ。各ページ21行。各行4.5インチ。ナスターリーク体。17世紀作成。『アクバル・ナーマ』第1巻。同巻第2部は177a から始まり、アクバル治世第17年の記述までを収める。写本冒頭部6葉ほどが欠損。(Rieu, I, p. 249)

遊び書中央部に後世の筆で *Ta'rikkh-i Amīr Tīmūr IO* と書かれた紙片が貼付されている。IO は India Office (インド省) の略記か。冒頭数葉欠落。枠取りなし。見出し語は朱筆。虫喰いによる破損が相当あるが、写本後半部の保存状態はよい。余白に校合の跡を示す墨筆の書き込みあり。177a から始まる第2部劈頭にウンワーンもなければ改行さえなし。この写本は

王侯貴族向きに作成されたものではなく、知識人用のものであったと思われる。赤皮革の装丁は当初のものようだ。

〔 6 〕 British Library Add. 26,203

676葉。15×9インチ。各ページ21行。各行5.5インチ。崩したナスターリーク体。ヒジュラ暦1232年(西暦1817)シャーバーン月の日付。『アクバル・ナーマ』第1巻と第2巻。第1巻第2部は157bから見出しなしに始まるのに対し、欽定暦制の章が始まる161bにウンワーンが設けられている。第2巻は319bから始まり、同巻の結語は676aで終わる。この写本には各ページの半分以上を占める76葉の細密画が収められている。(Rieu, I, p. 251)

1aに *Ta'rikh-i Akbar-nāma* と墨書し、その下の中央部に *Ukbur Nama* とペン書き。2bから本文。このページの上部に金泥を配した立派なウンワーンあり。赤の二重線、その外側に青の三重線の枠取りがあり、さらにその外周部に青線の枠取りがある。見出し語は朱筆。紙質から見ると、この写本はいかにも19世紀作成のものだと判る。この料紙に細密画は直接描かれている。冒頭からの筆蹟(仮りにXとする)は、63aから別筆(Y)に変更する。378bから当初の筆蹟(X)に戻るが、393aから再び筆蹟(Y)に変わる。524aからさらに別の筆蹟(Z)が登場し、534aから三たび筆蹟(Y)となった後、669b, 1.5から筆蹟(Z)に引き継がれて、写本の最後までこの筆蹟が続く。細密画はかなりよく描かれている。160b, 161aは空白。第1巻第2部は318aで終わり、318bと319aの空白を経て319bから第2巻が始まる。ここにも金泥を配したウンワーンあり。アクバル治世第47年の記述は671aの最後の行から始まり、671bの数行を経て直ちに結語へと移る。

〔 7 〕 British Library Add. 26,204

221葉。15.27×9インチ。各ページ29行ないし31行。各行5.5インチ。小さ目の字の均斉のとれたナスターリーク体。恐らく17世紀作成。『アクバル・ナーマ』第1巻。この巻の第2部は101bから始まる。皇子ダーニアルの生誕の記述と結語で終わる。(Rieu, I, p. 249)

装丁は後世のもの。1bにウンワーンはないが、第2部の冒頭には設えている。各ページに金泥と黒線の枠取り。しかし枠取りを省いたページも少くない。余白に校合を示す記入があり、後世の鉛筆書きも。100bと101a空白。上質の料紙を使用した大型の写本。

〔 8 〕 British Library Add. 26,207

338葉。10.5×6.75インチ。各ページ25行。各行4.75インチ。小さ目の字の均斉のとれたナスターリーク体。明らかに17世紀前半の作成。『アクバル・ナーマ』の第2巻。334b-338aに結語全文を収める。結語直前の333bには、シャージャハーン時代の宮廷の高名な詩人ムハンマド・アーリフ・シャイダー (Muhammad 'Ārif Shaidā) の覚え書きが捜入されており、デ

カン地方遠征隊司令官ハーン・ザマーン・バハードゥル・フィールーズ・ジャング (Khān Zamān Bahādur Firūz Jang) の命によって、この巻の改訂版をシャージャハーンの治世第1年バフマン月25日 (1629年2月15日) にジャールナープール (Jālnāpūr) で完成させたと述べている。(Rieu, I, p. 251)

各ページは朱の二重線で枠取り。一目して料紙の古さが判り、写本の古さを連想させる。各葉表の左上隅に朱筆で葉数番号が付されており286から始まるが、これは明らかに第1巻からの通し番号である。14aの最下行からアクバルの治世第18年の記述が始まる。各ページ余白に訂正の書き込み。これは写本作成当時のものと考えられるが、後世の鉛筆書きの書き込みも処々の余白に散見される。治世第46年の記述は326bから始まり、治世第47年の記述は333b, 1.15から4行のみ。334aは空白。この次のページから結語。裏の遊び紙に Purchased of C. J. Erskine, Esq. Feb. 1865 と押印されている。歴史家のイルファン・ハビーブはその著『ムガル朝インドの土地制度』巻末の文献一覧において、この写本を信頼のおける写本とし、この写本によってベンガル・アジア協会版刊本を詳細にわたって校合した旨明らかにしている<sup>(2)</sup>。

〔9〕 British Library Add. 27,247

461葉。12×8.5インチ。各ページ30行ないし34行。各行6.5インチ。ナスターリーク体。ヒジュラ暦1080年 (西暦1670) ズール・カーダ月の日付。アクバル生誕からフマーユーン時代までを扱う第1巻第1部は2bから始まり、アクバル登極から治世第17年末までを扱う第1巻第2部は112aから始まり、治世第18年初から治世第46年末までを扱う第2巻は245aから始まる。ただし第2巻中のスーラト攻城を述べた f.239 から f.244 までの部分は第2巻の結語の後にくるが、この結語の前に置かれるべきである。第3巻は *Ā'in-i Akbarī* なる別個の書名が付けられるが、そのうちの兵器庫に関する章のみが第2巻のうちの345a以降に捜入され、380bから再びもとの第2巻の記述に戻る。この写本の本文は刊本のそれと比べると、しばしばかなり異っているところがある。(Rieu, I, pp. 248-248)

31×21.5センチメートル。各ページ26行ないし37行。各葉表面 (a面) 左上隅に墨筆で葉数番号の記入があり、その横に後世の鉛筆書きの葉数番号が併記されている。最終葉の墨筆の番号は449、鉛筆書きの番号は461。上記リユーのカタログ摘記に461葉とあるのはこの数字による。ただし、鉛筆書きの葉数番号は冒頭の遊び紙から数え起こしているため、写本の本体は460葉と数えることができる。混乱を避けるため、リユーの付したと思われる鉛筆書き葉数番号に従うこととする。この写本には、いずこにも飾り扉のウンワーンはない。このことからしても、この写本が草稿段階のものであると考えることができる。見出し語は朱筆。余白に別筆の記入あり。冒頭部の数葉には余白部に破損が見られ、別筆の記入が判読不能となっている。しかし丁寧な補修がなされている。最初の5葉には朱筆の読点が振られている。本文の筆蹟はシカスタ体に近いナスターリーク体。9b、10b、11b、13bの占星図は、いかにも草稿段階のそ

れらしく粗雑な描き方。各ページには校合ないし修正の跡が認められる。17a から 32a に至る各葉の 1 行目と 2 行目は湿気を受けて消失し判読困難となっている。これに比して虫喰いの方は少なく、古写本にしては保存状態がよい。草稿写本であるため上質の料紙は使用されていず、また各ページの枠取りもすべて省かれている。245a からは、最初からの筆蹟 (P) とは別の筆蹟 (Q) となり、287b からはさらに別の筆蹟 (R) となる。しかし 317a の中途から筆蹟 (Q) に戻り、345a から再び筆蹟 (R) となり、380a から終末まで最初の筆蹟 (P) となって終わる。かくしてこの写本も〔6〕British Library Add. 26,203 と同じように、3 人の筆耕によって筆写されたことが判る。

この写本の全体構成をここでまとめて書いておこう。

2b—112a 第 1 巻第 1 部

112a—244b 第 1 巻第 2 部

ただし 239a—244b は 231b の後に続くべきである。232a—237b は結語。238ab は空白。

245a—344b }  
380b—461b } 第 2 巻

ただし治世第28年後半から治世第34年までの記述部は欠落。379b、380a は空白。

345a—379a 第 3 巻 (*Ā'im-i Akbari*) の兵器庫の章

354b、362b 空白。363a も下 3 行のみ。

イルファン・バビーブは前掲の書でこの写本を『アクバル・ナーマ』の初期の草稿と位置づけ、この写本の表現が完成稿のそれと一致する場合があるにしても総じて洗練度が低く、欠落が少なくないこと、にもかかわらず完成稿では削除されてしまった地租制度改正に関するトータル・マルの献言 (1582年) とそれに対するアクバルの評言や、高級軍人官僚 (マンサブダール) の任用に関する皇子ムラードの質問に対してアクバルが与えた回答など、他の文献では確認できない重要文書が採録されていることを指摘している<sup>(3)</sup>。

#### 〔10〕British Library Add. 27,248

264葉。12×8 インチ。各ページ25行。各行5.25インチ。ナスターリーク体。イラーハーバードにて、ヒジュラ暦1166年 (西暦1753) 第 1 ラビー月の日付。2つの部分から成り、前半にはアクバルの治世第17年までの記述を含む第2<sup>マ</sup>巻 (第1巻) の第2部を収め、後半には第3巻 (*Ā'im-i Akbari* の書名をとる) の第1部を収める。(Rieu, I, p. 251)

2a から本文開始。ウンフーン用の空所はあるが描れてはいない。その下に朱筆で *shurū'i daftar-duyum-i Akbar-nāma* (アクバルナーマ第2部の開始) と書かれている。*Akbar-nāma* の直前に *jald awal* (第1巻) が省かれているために、上記リユーのカタログのような誤記が生じたようだ。枠取りはなし。余白に校合を示す墨筆の記入。見出し語は朱筆。191b, 1.14 から第1巻第2部の結語が始まるが、見出しは全く記されていない。200b、201a 空白。201b

から第3巻すなわち『アクバル会典』が始まるが、ウンワーンはなし。ここでは『アクバル会典』序言および第1部「皇室」の全文と第2部「軍隊」の冒頭部2章のみが収められている。このように『アクバル・ナーマ』の第1巻第2部と『アクバル会典』の第1部および第2部の極く一部のみを合冊して一書に収めるというこの写本の構成は不自然である。あるいは顧客（写本注文者）の求めに応じて、このような作成のされ方となったのであろうか。写本は同一筆蹟、同一料紙と認められ、製本も作成当時のものようであるが、各葉左上隅に付された当時の葉数番号は前半と後半とで別々に書き起されている。

**[11] British Library Or. 1709**

214葉。8.75×6.25インチ。各ページ13行。各行3.12インチ。崩れたナスターリーク体。明らかに17世紀に作成されたもの。第1巻第1部の写本。(Rieu, III, p. 928)

小型の写本。冒頭部と末尾部に欠落。枠取りなし。料紙は明らかに17世紀のもの。余白に訂正の書き込み。虫喰いはないが、湿気による汚損が各葉に見られる。見出し語は朱書化されていない。裏の遊び紙に Purchased of the son of Sir Henry M. Elliot 13 Apr. 1878. と押印されている。装丁は後世のもの。

**[12] British Library Or. 2041**

16葉。21.5×13インチ。各ページ35行。各行7インチ。ナスターリーク体。黄金線の枠取り。明らかに17世紀の作。大型写本の別個の2帖を綴じたもの。それらは、それぞれアクバルの治世第20年の記述部分と第26年から第28年の記述部分とである。(Rieu, III, p. 928)

52.5×29.5センチメートルの大型、豪華写本の一部。立派な料紙を使用。虫喰い等の破損なし。黄金の枠取り。見出し語は朱筆。5a および 13a の葉中央部に半ページ分大の細密画が描かれているが、顔料が変色して彩色の鮮かさが失われている。装丁はいうまでもなく後世のもの。末尾の遊び紙に [11] の写本と同じ英文が押印されている。

**[13] British Library Or. 8379**

448葉。30×20センチメートル。19世紀の写本。(Meredith-Owens, p. 18)

黄金を配した開巻扉（ウンワーン）。二重の墨線とその外側を囲む朱線から成る三重の枠取り。草書風のナスターリーク体。各ページ17行。見出し語は朱筆。余白に訂正の墨筆。紙質から19世紀前半の作と思われる。湿気による汚損がかなり進行している。『アクバル・ナーマ』第1巻第1部および第2部の写本で、アクバル登極の記述は210a最後の行から、また治世第2年の記述は229bからそれぞれ始まり、治世第17年末の記述まで含む。

**[14] British Library Or. 9182**

イギリス、フランスに所蔵される『アクバル・ナーマ』の写本について (近藤 治)

308葉。28×14センチメートル。荒廃した写本の残巻。ヒジュラ暦1054年（西暦1644/45）の作成。(Meredith-Owens, p. 18)

各ページ21行。草書風ナスターリーク体。装丁崩壊。各葉周辺部の破損と虫喰の進行甚し。朱筆の使用なし。製本がなされていないため、利用することは極めて困難である。

#### [15] British Library Or. 9183

287葉。23.8×16.4センチメートル。『アクバル・ナーマ』第1巻の写本。18世紀の作。(Meredith-Owens, p. 18)

各ページ17行。二重の朱線の枠取り。流麗なナスターリーク体。見出し語は朱筆。写本首部と尾部に欠落あり。残存している各葉の保存状態は極めてよく、虫喰いはほとんどない。1aの余白に Vol. I. 137 と鉛筆で記入され、以下各葉余白にこれに続く数字が鉛筆書きで順次記入されている。思うに、これはビブリオテカ・インディカ版刊本テキストと校合したものであろう。その傍証となるのが、79a 左上隅の余白に記された p. 2 of B.I. vol II という鉛筆書きである。B.I. は Bibliotheca Indica の略記であることは間違いない。80a 以下の各葉には3以降の数字が順次鉛筆書きされている。アクバルの治世第15年の記述は287a から始まる。しかしこの写本の筆写は287b で突然途切れており、これより後は欠落してしまっている。このページの最後の行の横の余白に p 442 1.2 との鉛筆書きがある。以上の検討によって、この写本は『アクバル・ナーマ』第1巻第1部および第2部の合冊本のうち、第1部の前半部、すなわちビブリオテカ・インディカ版刊本第1巻136ページ以前相当部と第2部の後半部、すなわちアクバル治世第15年冒頭部の記述以下とが欠落した写本、ということが出来る。鉛筆書きの主は一体誰であろうか。それを解く鍵は、裏の遊び紙に記されている Presented by H. Beveridge, Esq. 14 April 1923 なるペン書きである。H. Beveridge とは『アクバル・ナーマ』英語版大冊3巻 (Calcutta: Bibliotheca Indica, 1897-1921) を一人で完訳したヘンリー・ベウァリッジその人。彼がこの写本とビブリオテカ・インディカ版刊本と校合しながら鉛筆書きを記入した、と考えてまず間違いないであろう。そういえば、この鉛筆書きは旧インド省図書館（現在は大英図書館の Oriental and India Office Collections）で発見した彼のペン書きの筆蹟とよく似ているように思われる。

#### [16] British Library Or. 12988

163葉。41.3×28.4センチメートル。『アクバル・ナーマ』第1巻。「黄金のペン」(zarrin-qalam) と称された筆耕ムハンマド・フサイン・カシュミーリー (Muḥammad Ḥusain Kashmiri) の手になる見事な写本。17世紀初期の作成。細密画収載（その一つの枠外記にアクバルの治世第47年（1601/02）の記録あり）。漆塗りの装訂。(Meredith-Owens, p. 19)

各ページ22行。ナスターリーク体。各ページ金泥の枠取り。その内側と外側をそれぞれ朱線



と青線の縁取り。細密画の彩色、構図とも見事で保存状態良好。1987年12月29日、大英博物館の King's Library Gallery で展示中のこの写本を実見。写本の 52b-53a が展示されており、そこに描かれている細密画——ラール (La'ī) の手になるパーブルのフマーユーン後継皇帝任命の図——に、1602ないし1605年ごろの作品とする説明文が付けられていた<sup>(4)</sup>。

〔17〕 IO 4, Ethé 235

765葉。13.6×6.75インチ。各ページ21行ないし23行。ナスターリーク体。2人の筆耕の手になる。1b、5b、401bに細密画。『アクバル・ナーマ』2巻の写本。第1巻第1部は5bから始まり、序言とフマーユーンの死(1556)に至るアクバルの先祖の記述。第1巻第2部は201aから始まり、アクバルの登極から治世第17年末までに至る記述。第1巻の結語は392aから始まる。第2巻は401bから始まり、アクバルの治世第18年初から治世第46年末および第47年初までに至る記述。ムハンマド・サーリーフ (Muḥammad Ṣāliḥ) による治世第50年までに至る追加の記述は、この写本に含まれていない。第1巻の写本はシャー・ムハンマド・ビン・ファトフ・ムハンマド・ラーホーリー (Shāh Muḥammad bin Faṭḥ Muḥammad Lāhorī) によってヒジュラ暦1065年第1ラビー月27日(西暦1655年2月4日)に成ったものであり、第2巻はムハンマド・クライシュ・クライシー (Muḥammad Quraish Quraishi) によってヒジュラ暦1106年第2ジュマダー月24日(西暦1695年2月9日)に成ったものである。(Ethé, I, pp. 99-100)

1b 上部5分の1にウンワーンあり、黄金を配す。太い黄金枠と赤線によって各ページの枠取りがされている。各ページは22行が基本。料紙から一見して古い写本であることが分かる。破損状態にあった各葉は薄紙で表裏補修した後全巻を1冊に製本しているが、冒頭の12葉までと752以下の各葉とは補修法が粗雑である。1b-4aは序言。5bにまたウンワーンがあり、ここから第1巻第1部が始まる。本文中や余白に2種の墨筆による記入があり、刻明な訂正・校合の跡を示す。見出し語は朱筆。201a 上半分で第1巻第1部の記述終了。これにすぐつづけて第1巻第2部が始まる。アクバルの治世第17年までの記述は392aまで続き、ついで第1巻結語が400aで終わる。このページの下3行に書かれたコロフォンは次のように読める。ba-ta' rīkh-i bīst u haftum Rabi' Awwal sana-yi 1065 kitaba-yi az'af al-'ibād Shāh Muḥammad ibn Faṭḥ Muḥammad Lāhorī ([ヒジュラ暦] 1065年第1ラビー月27日にて、最もか弱き僕シャー・ムハンマド・イブン・ファトフ・ムハンマド・ラーホーリーの書きしものなり)。400bの周辺部にいろいろな書き込みが認められるが、補修の際に切断されてしまっている。第2巻は401bから始まる。ここにウンワーンあり。各ページ22行が続き、628aから各ページ23行となる。第2巻の料紙の紙質は第1巻のそれよりも後の時代のものであることは明らかで、汚損、虫喰いはほとんどない。枠取りも第1巻とは異なり、二重の赤線とその外側の青の単線による三重線でなされている。第1巻同様に余白に墨筆の訂正・校合の記入があり、この訂正・校合

の筆蹟は第1巻のそれと同じである。治世第18年の記述は416aから始まり、治世第46年の記述は754bから、治世第47年の記述は761bからそれぞれ始まっている。治世第30年の記述と第31年の記述との間、すなわち632bから640bに至るところで第1巻の結語と第2巻冒頭部の記述とが再度書写されていることは、エテの目録で指摘されている通りである (Ethé, *ibid.*, p. 100)。第2巻末のコロフォンには筆耕の Muḥammad Quraish Quraishī が登場する。

[18] IO 2403, Ethé 256

343葉。13.25×9.4インチ。各ページ21行。明瞭なナスターリーク体。筆写完了はヒジュラ暦1048年ラマザン月24日 (西暦1639年1月29日)。『アクバル・ナーマ』第2巻の写本。製本に際し各葉の順序が間違っていて綴じられており、正しい配列は1—144、153—160、145—152、161—343である。(Ethé, I, p. 110)

1aには夥しい数の書き込みがあり、左上隅に朱筆で「シャイフ・アブル・ファズル・ムバラクの著作になるアクバル・ナーマ第2巻」とペルシア語書きされている。円形の印影が2つあるが、いずれも消去されて判読できない。1b上半部に金泥を配した豪華なウンワーンが描かれている。料紙は年月を経て茶色に変色。見事な大き目の字のナスターリーク体。赤の二重線、青の単線、都合三重線の枠取り。虫喰がかなり進んでいるが、大きな損傷はない。余白に校合の墨筆の記入。見出し語は朱筆。280a-285aは別筆のシカスタ体に近い崩したナスターリーク体で筆写されている。巻末にも印形が8つ認められるが、これらも黒くぬりつぶされるか消去されている。

[19] IO 2654, Ethé 3010

379葉。14.9×8.9インチ。各ページ21行。大き目の字の見事なナスターリーク体。『アクバル・ナーマ』第1巻の写本。作成の日付なし。第1部は1bから、第2部は185bからそれぞれ始まる。(Ethé, II, p. 5)

1aの左上方に『アクバル・ナーマ』の書名が書かれ、葉央には次のように墨書されている。daftar awal-i *Akbar-nāma* sarkār-i Nawāb-ṣāhib mumtāz al-daula mufakhkhar al-mulk jāmi-jang mistar Richārd Jānsun ṣāhib-i bahādur dāma iqbāla. (アクバル・ナーマ第1巻。国家の選良、国の栄光、戦いの鑑なるナワーブ閣下の政府より雄士 Richard Johnson 氏へ。願わくば幸運の永続せんことを)。これと同じ文章は、すでに紹介した [17] の写本の冒頭部にも書かれていた。[17]の方では上記の文章のすぐ下に鉛筆書きで Johnson MS と書かれていた。この写本も同様に「ジョンソン写本」ということになる。「ナワーブ閣下」が誰であるのか、まだ特定していない。このほかにも大小の書き込みが多く見られるが、それらの多くは墨で完全にぬりつぶされたり、判読不能状態となったりしている。本文は1bから始まり、その上部3分の1がウンワーン用に空けられているが、ウンワーンは描かれていない。各ペー

ジは金泥の太い枠とその外側の細い黒線によって枠取りされている。枠取りの外側の余白は十分に広いが、書き込みは処々に散見されるのみ。僅かの虫喰いのみ見られ、極めて恵まれた保存状態にあったことが分かる。料紙の厚目の紙質、その変色度、書体、写本の様式等から判断して、この写本は17世紀半ば、シャージャハーン時代のもものと推定される。見出し語は朱筆。全葉にわたって校合の跡が見られる。アルバルの即位の記述は185bから。ここにもウンワーン用の空白が用意されているのみで、実際には描かれていない。全巻同一の筆蹟で、見事なナスターリーク体。『アクバル・ナーマ』第1巻のこの写本と、直前の〔18〕で紹介した同書第2巻の写本とは、ともに比較的近い時期に作成されたと考えられる見事な写本であり、双方とも写真版にして身近かに備えておきたいという誘惑に駆られるものである。

〔20〕 Victoria and Albert Museum, Indian Study Room I.S.2-1896

この写本については、早くH. ベヴァリッジが短い紹介文を発表していたが<sup>(5)</sup>、その後管見の限りこれまでに2つの解説が発表されている。E. F. ウェレッツとアフマド・ナビー・ハーンがそれぞれ発表したものである<sup>(6)</sup>。前者は第2次世界大戦中に発表された、主に写本中の絵画について論じたものであり、後者は絵画を含む写本全体について解説したものである。ここでは後者に拠って、まず写本全体を概観してみよう。

274葉のテキストと117枚の細密画。15×10インチ。各ページ25行。テキストは通しの葉数番号の267aから始まり、それ以前は欠落。この写本の後続部分も欠落。黄金・赤・藍・黒・緑の五重線の枠取り。料紙は淡褐色の高級紙。優美なナスターリーク体。『アクバル・ナーマ』第3巻のうちの西暦1560年(1574年の間違い)から1577年までの記述部分で、ビブリオテカ・インディカ版テキストの第3巻 pp. 121-223 に対応する。この写本はアクバル時代の末期に帝室図書館用に作成されたもので、長らくここに保存され続け、少なくともアウラングゼーブ時代のヒジュラ暦1079年(西暦1668/69)まではそこに保存されていたことが、写本末葉に記されたアウラングゼーブ自身の裏書きによって確認できる。最も注目される裏書きはジャハーンギール直筆のもので、それは次のようなものである。Allāhu Akbar, Panjum-i Āzar sana-yi awwal dākhil-i kitāb-khāna-yi īn niyāzmand dar-gāh-i ilāhī shud. Muḥarrara Nūr al-Dīn Jahāngīr bin Akbar Pādshāh sana-yi 14. (神は偉大なり。即位元年アーザル月<sup>(7)</sup>5日。〔この書は〕これなる歎願者の図書館に収蔵さるべく入庫された。〔ヒジュラ暦1千〕14年(西暦1605)、アクバル皇帝の息子ヌールッディーン・ジャハーンギール記す)。一時、この写本はジャハーンギールの皇太子時代に皇帝アクバルから与えられたものとする解釈のなされたことがあったが、この解釈には無理があるようだ。この写本にはアワド藩王国の重臣と目される Aḥmad ‘Alī Khān Bahādur が書いたヒジュラ暦1208年(西暦1793/94)の年記のある裏書きがあるが、彼の所有に至るまでの帰属の転変については不明である。この裏書きによれば、この不完全写本の値段は7,000ルピーであった。ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館がこ

の写本をジョン・クラーク (John Clark) 少将未亡人から入手したのは1896年のこと。少将はアワド地方の弁務官 (Commissioner) を務めた人物であったので、彼はこの地方で写本を手に入れたものと思われる。だが、あろうことかこの美術館は細密画部分の各葉を写本本体から切り離してしまい、別個に保管するという国宝級文化財の破壊をやってしまった。さてその細密画であるが、当該期間中の事件やエピソードを描いたもので、都合117枚を数える。これらはそのほとんどが1ページ大の絵であるが、なかには見開き2ページにわたるものもある。周辺部には絵の主題と画家たちの名前が記されており、それによって大半の細密画は輪郭・肖像・彩色の各作業過程を2人ないし3人の画家たちが分担し、1人の画家のみによって描かれた細密画はまれであったことが分かる。彼らは総数56名で、多くはアクバル宮廷の著名な画家たちであった。(Ahmad Nabi Khan, pp. 424-429)

以上、アフマド・ナビー・ハーンの論文に拠って写本の概略的説明を行なった。この写本は現在、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館の Indian Study Room に保管されており、そこに備えられた解説文には『アクバル・ナーマ』3巻本の第2巻に当たる部分、と位置づけている。また各細密画にはタイプ刷り3～4行の説明文が付けられており、僅か2行の全体説明文のなかに、「この写本に日付はないが、〔絵画は〕1590年ごろに描かれた」という文章がある。私が調べてみたところ、写本のテキストは当初から記入されていたと思われる葉数番号の270葉から始まって540葉で終わっている。各ページ25行で、37.5×25センチメートル。細密画部分がすべて切り離されているため、葉数番号は272葉の次が278葉、その次が292葉というように飛んでおり、写本は実質解体状態となってしまう。細密画は実は116枚で、これに冒頭部の華麗に彩色された中扉 (ウンワン) を加えて都合117枚とされている。細密画の大きさは35×20.5、34.5×20.7、34.5×20.2、33.3×20.5センチメートルというように、厳密には同じでない。枠外には、本文とは別筆の朱筆で簡単な場面説明とともに、*ṭarḥ* Tulsī ‘amal Narāyan (輪郭トゥルシー、彩色ナラーヤン) とか *ṭarḥ* Basāwan ‘amal Sarwan (輪郭バサーワン、彩色サルワン) というように、担当した画家名が記されている。また各絵画には当初から記されていたと思われる朱筆の通し番号が振られており、この写本に最初に登場する細密画 (チーター生け捕りの場面) には朱筆で82の番号が書き込まれている。中扉の描かれた葉の裏面中央よりやや下の左辺には、すでに紹介したジャハーンギール直筆の5行からなる裏書きがある。

#### [21] Cambridge University Library, Palmer 31

『アクバル・ナーマ』の第1巻から第3巻。第1巻について「アクバルの皇子時代16年と治世8年間の歴史」、第2巻について「治世第8年から治世第25年まで」、第3巻について「治世第25年から治世第48年まで」の記述であると述べている。(Palmer, p. 4, *JRAS*, 1868, p. 108)<sup>(8)</sup>

第1巻について。アクバルは13歳と3ヵ月で即位したので、「皇子時代16年」というパーマ

一の記述はおかしい。朱筆で葉数番号が各葉左上隅に振られ、最後は323葉。最初の1葉には番号が振られていないので、全体で324葉ということになる。29.1×16.5センチメートル。各ページ21行。二重の朱線の枠取り。見出し語は朱筆。シカスタ体に近いナスターリーク体。枠取りの外に墨筆の訂正・追加の記入。料紙の紙質古く、虫喰い多し。だが保存状態は良好。1aに1.0×1.1センチメートルの蔵書印があり、〔ヒジュラ暦〕1166年（西暦1752/53）の年記が見える。323bに記されているコロフォンによると、この写本はアウラングゼーブの治世第40年（1697）に成ったものであることが分かる。第2巻について。671葉。29×16.8センチメートル。各ページ21行。料紙の紙質古し。見事なナスターリーク体。枠取りなし。見出し語は朱筆。余白に墨筆の訂正・追加や、後世の筆による書き込みがある。最後の671bの文章は途中で終わっているため、コロフォンはない。写本の虫喰い、変色は少ないが、テキスト本文の損傷はまずない。第3巻について。216葉。35.8×19.7センチメートル。各ページ25行。1aに、前稿〔27〕の『アクバル会典』写本のところで紹介したのと同じの角形印影があり、そのなかの年記〔ヒジュラ暦〕1181年（西暦1767/68）が明瞭に読み取れる。1bにウンワーン。黄金・朱・青・紫で装飾。各ページ朱の二重線と青の単線との都合三重線による枠取り。料紙は古いものを使用し、虫喰いはかなり進んでいる。見出し語は朱筆。余白に墨筆の訂正・追加の記入がある。筆蹟はインド風のターリーク体。134aで治世第40年の記述が完了してコロフォンが記入され、アールムギール（アウラングゼーブ）の治世第39年すなわち〔ヒジュラ暦〕1108年（1696）の年記がある。さらに最後尾216b上段に書かれているコロフォンによって、この写本が〔ヒジュラ暦〕1108年第2ラビー月6日（西暦1696年10月23日）に成ったものであることが示されている。以上の検討によって、3巻から成るこの『アクバル・ナーマ』写本の各巻は別々の筆耕によって異なる時期に作成されたものであることが明らかとなった。またこの写本は、ブラウンがかつて述べたような「著者（アブル・ファズル）の死の4年前の〔ヒジュラ暦〕1007年／〔西暦〕1598-9年に筆写された」<sup>(9)</sup>ものでは全くないことも明らかとなった。

**〔22〕 Cambridge University Library Oo. 6. 1, Browne LXXXVII**

『アクバル・ナーマ』第1巻（ビブリオテカ・インディカ版刊本テキスト第1巻と第2巻に対応）の写本。440葉。32.0×21.5センチメートル。各ページ18ないし20行。明瞭なインド風ターリーク体。数人の筆耕の手になる。（前稿で紹介した Browne, 1896, pp. 162-163）

枠取りなし。各ページ19行。余白に墨筆の記入。虫喰状態甚しいが、文字は鮮明に残っているため読みやすい。1a、10b、25b、33b 空白。テキスト本文の筆蹟はしばしば変わる。料紙の紙型、大きさ不統一のものがあ、折り込まれているものもある。とくに164、165、166、169の不統一は甚しい。209は後世の製本の際に上部の余白記入を途中で裁断している。簡単な索引はあるも、絵画は一切なし。358-360も大き目の紙を折り込んでいる。409aから25行。433aから再び19行。料紙の変色も進行しているが、全巻判読困難のところはない。巻末遊び紙にブ

ラウンの記入と思われる英文の写本説明がある。

**[23] Cambridge University Library Oo. 6. 2, Browne LXXXVIII**

『アクバル・ナーマ』第2巻(ビブリオテカ・インディカ版刊本テキスト第3巻に対応)の写本。278葉。35.5×22.2センチメートル。各ページ30行ないし36行。崩れたインド風ターリーク体。見出し語は朱筆。筆写はムハンマド・ハーシム・ビン・シハーブッディーン(Muḥammad Hāshim b. Shihāb al-Dīn)によってヒジュラ暦1042年第1ラビー月初日(西暦1632年9月16日)に完成。多くのページに部分的な空白が残っている。(Browne, 1896, pp. 163-164)

枠取りなし。ウンワーンの描写・彩色なし。虫喰い状態は甚しいが判読に障害はない。29aと50aにRām Sinhā-yi Bihārī La'1 1172と判読できる横長楕円形の印影がある。処々周辺の余白に墨書。筆蹟は何人かの手を経て筆写されたことを示している。巻末に大型紙2葉の折り込みあり(277、278)。巻末にブラウンのものと思われる鉛筆書きの写本説明文がある。

**[24] Cambridge University Library Add. 195(Lewis 15), Browne LXXXIX**

『アクバル・ナーマ』第1巻(ビブリオテカ・インディカ版刊本テキスト第1巻と第2巻に対応)の写本で、アクバル治世第17年までの記述。548葉。25.6×16.3センチメートル。各ページ17行。見事なナスターリーク体。見出し語は朱筆。コロフォンにヒジュラ暦1034年第1ジュマダー月14日土曜日(西暦1625年2月22日)の記入。筆耕はサドルッディーン・ムハンマド・ビン・ジャーファル・アリー(Şadr al-Dīn Muḥammad b. Ja'far 'Alī)。最終葉の裏面にヒジュラ暦1081年(西暦1670/71)の年記のある皇帝アールムギールの蔵書票(book-plate)が貼付してある。(Browne, 1896, pp. 164-165)

金泥の枠塗り。ウンワーンには黄金・青・赤で彩色。上質の料紙を使用。保存状態もほぼ完璧。やや小ぶりの写本。全巻同一の見事な筆蹟。251bからアクバル即位元年の記述が始まる。

以上がケンブリッジ大学に所蔵される『アクバル・ナーマ』の写本4種の紹介である。前稿の『アクバル会典』や今回の『アクバル・ナーマ』の写本を含むケンブリッジ大学所蔵ペルシア語写本の紹介・解説で特筆すべき足跡を残したのは、エドワード・G・ブラウンであった。ブラウンといえども想起されるのは彼の著した浩瀚な4巻本の『ペルシア文学史』であるが<sup>(10)</sup>、この畢生の大作の執筆の傍ら、彼はケンブリッジ大学所蔵写本のカタログ作成や文献リスト作りに取り組んでいたのであった<sup>(11)</sup>。

**[25] Bibliothèque Nationale Suppl. Pers. 273, Blochet 564**

『アクバル・ナーマ』第1巻(アクバル治世第17年まで)と第2巻(治世第18年から46年まで)の写本。701葉。34×23センチメートル。悪くないインド風ターリーク体。18世紀初めの作

成。赤皮の製本。1a に価格12ルピーと記入あり。(Blochet, I, pp. 337-338)

朱の二重線と青の単線、都合三重線の枠取り。1b にウンワーンなし。65a から朱の二重線のみの枠取り。1a に確かに qīmat dawāzdah rūpiya (価格は12ルピー) と書かれている。33.5×22センチメートル。各ページ21行ないし22行。余白に墨筆で校合の記入。見出し語は朱筆。葉数番号は後世のペン書き。アクバル即位元年の記述は 175b から、治世第18年の記述は 359a からそれぞれ始まり、治世第46年の記述で終わる。虫喰いや汚損は少ない。

**[26] Bibliothèque Nationale Suppl. Pers. 1333, Blochet 566**

『アクバル・ナーマ』第1巻の写本。356葉。30×19センチメートル。見事なインド風ナスターリーク体。黄金および彩色で飾った扉と縁取り。ヒジュラ暦1021年(西暦1612)の年記あり。モロッコ皮の装訂。(Blochet, I, p. 338)

黄金を配したウンワーン。各ページ23行。枠取り線はなし。優美なナスターリーク体の筆致。見出し語は朱筆。余白の書き込みはほとんどない。虫喰い、汚損いずれもなく、非常に良好な保存状態であったことが分かる。287葉から296葉までは別の筆蹟。光の当て方によっては、写本筆用の定規(ミスタル miṣṭar)の上に料紙を押えつけてできた線の跡の確認できる場合が間間あった。プロシュエのカタログはこの写本がジャハーンギール時代のヒジュラ暦1021年に作成されたことを示す年記があるということであるが、残念ながら私にはそれが確認できなかった。料紙の紙質から判断すると、そんなに古い写本のように思えなかったのだが、どうだろうか。それに、1612年の古写本とすれば、ミスタルの線跡が今だに消えずに残っているというのも不自然な感がしないでもない。

**[27] Bibliothèque Nationale Suppl. Pers. 280, Blochet 576**

アクバルの治世第18年の記述から始まる『アクバル・ナーマ』第2巻の写本。313葉。37×22センチメートル。インド風ナスターリーク体。枠取りあり。ヒジュラ暦1082年(西暦1671)の年記あり。赤色のモロッコ皮の装丁。(Blochet, I, p. 340)

太い黄金線と黒・青の二重線、都合三重線の枠取り。料紙の紙質、写本の体裁、保存の状態からして、この写本の方が[26]の写本より古いものであることは疑えないように思われる。余白に校合の書き込みが処々見られる。313aのコロフォンにヒジュラ暦1082年ズール・ヒツジャ月(西暦1672年4月)と年月が記されている。

## おわりに

私が1987-88年のイギリス滞在中自らに課していた課題の一つは、彼の地の各研究機関に所蔵される『アクバル会典』の写本にできるだけ多くふれ、実際に確かめ、慣れることであった。

今回本稿で取り上げた『アクバル・ナーマ』の写本の検討は、いわばその副産物である。イギリスやフランスに所蔵されている数多くの『アクバル・ナーマ』の写本からすれば、本稿で紹介した27種の写本数は明らかに不十分なものである。本稿を一瞥すればすぐ気づかれるように、オックスフォード大学所蔵の『アクバル・ナーマ』写本の紹介は全くなされていない。この大学街に滞在していたとき、私は同大学所蔵の『アクバル会典』の検討に集中していたので、これはやむをえないことであった。以下、若干気になることを箇状書き風を書いていくことにする。

(1) 王立アジア協会所蔵の『アクバル・ナーマ』写本7種について。ロンドンの王立アジア協会に所蔵される『アクバル・ナーマ』の写本については、W. H. モーリーのカタログの写本番号109から115に至る7種が存在することが知られている。それらのうちの110の番号が付されたものは、アクバルの治世第17年までの記述を収めた第1巻の写本であり、ヒジュラ暦1014年(西暦1605)の年記のある古写本であることがカタログから分かる。しかし前稿で述べたような事情で、『アクバル会典』の写本同様これらの写本も当時は閲覧することができなかった。

(2) チェスター・ビーティ図書館所蔵の『アクバル・ナーマ』写本について。〔16〕で紹介した大英図書館 Or.12988 写本は、残存する他の一部がアイルランドのチェスター・ビーティ図書館にも分割して所蔵されていることを本稿の注(4)で指摘した。この優れた古写本のいま一方の残巻を実見することはできなかったが、滞英中に2つの豪華な大版の写真集を手にするによって写本中の見事な細密画を鑑賞することができた。一方の書名は Thomas W. Arnold, *A Catalogue of the Indian Miniatures, the Library of A. Chester Beatty*, revised and edited by J.V.S. Wilkinson, 3 vols., Vol. I: Text, Vol. II: Plates, Vol. III: Plates, London, 1936 である。この書は45.5×31.5センチメートルの超大冊であり、『アクバル・ナーマ』の細密画はすべて原寸大のカラーおよびモノクロ写真で第2巻に収められている<sup>(12)</sup>。いまひとつの大版の写真集は Thomas W. Arnold and J.V.S. Wilkinson, *Chronicle of Akbar the Great, a Description of a Manuscript of the Akbar-nāma Illustrated by the Court Painters*, Oxford, 1937 である。この方は、チェスター・ビーティ図書館に所蔵される『アクバル・ナーマ』の写本中の細密画を原寸大のカラーおよびモノクロ写真によって紹介しながら、アクバルの事蹟を年代順に述べていったものである<sup>(13)</sup>。この写本は268葉あり、大英図書館に所蔵される〔16〕の写本の葉数よりもはるかに多い。写真版で見る限りこの写本はほぼ43×26センチメートルの大きさで、各ページ22行である。ビブリオテカ・インディカ版刊本の第2巻と第3巻264ページまでに対応する。コロフォンはないが、1602年から1605年の間の作成で、アクバルの帝室図書館用に作成されたものと考えられている。

(3) ベヴァリッジの紹介した写本について。H. Beveridge は『アクバル・ナーマ』全巻の英語版の遂行という大業を果たした学者である。彼は次の論文 “A New MS. of the Akbar-nāma,” *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 1903, pp.



115-122において、新たに実見した『アクバル・ナーマ』の写本について以下のように紹介している。この写本は『アクバル・ナーマ』第1巻の草稿で、フマーユーン死亡の記述で終わっている。184葉。10×6インチ。各ページ21行。明瞭なナスターリーク体。古写本で、アブル・ファズル生存中のものかもしれないという。表紙用厚紙の内側に *Tawārīkh-i Taimurī* のタイトルが記されている。2人ないそれ以上の人数の校合者の手による数多くの記入がある。この写本にはビブリオテカ・インディカ版刊本や完成写本にはない記述があちこちに見られる。『アクバル・ナーマ』の完成稿では、図書館用建物でのフマーユーン転倒の日を金曜日としか記していないが、この草稿写本によってそれがヒジュラ暦963年第1ラビー月11日金曜日（西暦1556年1月24日）、死亡が2日後の同月13日日曜日（同年1月26日）であったことが明瞭となる。またこの写本には刊本には含まれていない書簡4通が収められている、等々の事例をベヴァリッジは指摘する。彼はこの写本を Saiyid ‘Alī Bilgrāmī Shams al-‘Ulamā から見せてもらったといい、後者はハイダラーバードでこの写本を購入したと述べているという。ベヴァリッジが如上の論文を発表して以来すでに1世紀余を経ているが、現在この写本は一体どこに保管されているのであろうか。

(4) 写本の価格について。〔20〕の写本の値段は7,000ルピーと記入され、〔25〕の写本の値段は12ルピーと記入されていた。前者はアクバル時代の第1級の画家たちが動員されて競作した豪華な絵画117枚を収めた、帝室図書館用の古写本であるところから、ある程度は予測可能な価格といえなくもないが、後者の『アクバル・ナーマ』第1巻と第2巻を合した701葉の巨冊が12ルピーというのは安すぎる価格ではないのか。一体、写本の価格はどの程度の相場だったのであろうか。そんな疑問がわいてくる。時代はかなり下って19世紀の前半、1824年から1825年にかけて北インドを広く旅行したイギリス人ヒーバー主教が衰退の甚しい港市スーラトを訪れたとき、この町のかつての富裕と栄光を極めたイスラーム教徒の商人が生存のために非常に高価な本を処分しようとしていたことを知り、そのことを彼の旅行記に書き残していたので<sup>(14)</sup>、この時代でも貴重な家宝の図書が高額の取引きの対象となっていたことが分かる。では、ムガル朝時代の相場はどうであったのだろうか。これについてはイルファン・ハビーブの論文が参考になる<sup>(15)</sup>。彼によれば、前稿〔14〕で紹介した『アクバル会典』の写本 (IO 6) は、1763/64年の時点で157ルピーでアウランガーバードの著名なペルシア語詩人に売られたが、当時としては非常に高額であったという。この詩人は11冊の図書をしめて500ルピーで購入したと誇らし気に記しているが、とすれば1冊平均46ルピー強の価格となり、これでも高額である。通常の写本の価格は1～2ルピーから5ルピー程度の相場であったであろう、とイルファン・ハビーブは推計している。ともあれ、『アクバル・ナーマ』や『アクバル会典』の写本ともなれば、当時の貨幣が有していた購買力に照してみても、大変高価なものであったことは間違いないであろう。

〔注〕

- (1) 近藤 治 「イギリス、フランスに所蔵される『アクバル会典』の写本について」『文学部論集』(佛教大学) 第89号、2005年、13-32ページ。以下では前稿と略記。
- (2) Irfan Habib, *The Agrarian System of Mughal India 1556-1707*, 2nd revised edition, New Delhi: Oxford University Press, 1999(1963), p. 482.
- (3) *Ibid.*, p. 482.
- (4) この写本については、Jeremiah P. Losty, *The Art of the Book in India*, London: The British Library, 1982, pp. 93-94 にかかなり詳しい解説があり、口絵の Plate XXX には開巻部 1b-2a のカラー写真が収められている。またこの書は、アクバル末期のこの優れた写本が現在では大英図書館とアイルランドのチェスター・ビーティ図書館 (Chester Beatty Library) とに分割して所蔵されていることを明らかにしている (*ibid.*, p. 82)。
- (5) H. Beveridge, “Note on an Illuminated Persian Manuscript,” *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 1905, pp. 365-366.
- (6) E.F. Wellesz, “An Akbar-namah Manuscript,” *The Burlington Magazine*, Vol. 80, 1942, pp. 135-141; Ahmad Nabi Khan, “An Illustrated Akbarnāma Manuscript in the Victoria and Albert Museum, London,” *East and West*, new series, Vol. 19, 1969, pp. 424-429.
- (7) アクバルが採用した春分の日を元旦とする太陽暦 (イラン暦) の9月。グレゴリウス暦の11月22日から12月21日までの30日間に対応する。
- (8) 前稿の注(3)において、ケンブリッジ大学図書館所蔵の写本カタログとして Edward H. Palmer (1867) と Edward G. Browne (1896) の2書を挙げておいた。前者は同じような版型で *The Journal of the Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, new series, Vol.3, 1868, pp. 105-131 に再録されており、同図書館備え付け用カタログの第1ページは *JRAS*, Vol.3 の105ページに対応する。
- (9) Edward G. Browne, *A Supplementary Hand-list of the Muḥammadan Manuscripts, Including All Those Written in the Arabic Character, Preserved in the Libraries of the University and Colleges of Cambridge*, Cambridge, 1922, p. 16.
- (10) Do., *A Literary History of Persia*, 4 vols., Cambridge, 1969, 1st edition, 1902-1924.
- (11) 前稿注(3)の [iv] で掲げたカタログや、本稿注(9)で掲げた文献リストの他に、ブラウンが手がけた写本関係の仕事としては、Edward G. Browne, *A Hand-list of the Muḥammadan Manuscripts, Including All Those Written in the Arabic Characters, Preserved in the Library of the University of Cambridge*, Cambridge, 1900 がある。また彼が有していた写本類のカタログ R.A. Nicholson (ed.), *A Descriptive Catalogue of the Oriental MSS. Belonging to the Late E.G. Browne and at Present Deposited in the Cambridge University Library*, Cambridge, 1932 には、この一世の碩学の詳しい経歴と著作目録が収められている。
- (12) Vol. I, pp. 4-12 には、この写本中に描かれている61枚の絵の見出しと解説が示されている。
- (13) この書の16-25ページでムガル朝宮廷における細密画の作成について、また26-31ページで当該の写本について、それぞれ詳しい解説を行なっている。
- (14) M.A. Laird (ed.), *Bishop Heber in Northern India: Selections from Heber's journal*, Cambridge, 1971, p. 315.
- (15) Irfan Habib, “Persian Book Writing and Book Use in the Pre-Printing Age,” *Proceedings of the Indian History Congress*, 66th Session, Santiniketan, 2005-06, pp. 514-537.

(こんどう おさむ 人文学科)

2007年10月17日受理